

其激昂ノ度ヲ弛メ一時殆ト曰英兩國ノ間ニ重大ナル外交
關係ヲ起サムトシタル出來事モ幸ニ無事妥穩ノ局ヲ告ケ
タリ之ヲ要スルニ豊島ノ海戰ハ交戰國タル清國ニ對シテ
モ中立國タル英國ニ對シテモ日本海軍ハ戰時國際公法ノ
規定ノ外ニ逸出シタル所爲ナカリシコトヲ世界ニ發揚シ
タルハ實ニ名譽ト謂フヘキナリ

第十一章 朝鮮内政改革ノ第二期

明治二十七年七月二十三日事變後ノ朝鮮ハ恰モ敗屋破窓
ノ人家カ疾風大雨ニ遇フタル後天氣俄ニ快晴シタルモ家
中尙ホ狼藉混雜ヲ極ムルカ如ク今後如何ニ其國ノ獨立ヲ
確立シ内政改革ヲ舉行スヘキカ矇昧無識ノ朝鮮政府ハ勿
論何等ノ定見ナク我政府力之ヲ誘掖扶植セムト欲スルニ
モ殆ト手ヲ着クル所ヲ知ラサル形勢ナリ然レトモ我政府
ハ嘗テ朝鮮ノ獨立ト其内政ノ改革トヲ以テ日清交戰ノ原
因ナリトシ之ヲ世界ニ表白シタリ我政府力第一着ニ施行

暫定合同條款

スヘキ急務ハ先ツ朝鮮政府ヲシテ内外ニ向ヒ確ニ獨立國
タルノ實ヲ表彰セシメ又我國ニ對シ其内政改革ノ事業ヲ
逐次ニ舉行スヘキコトヲ明約セシムルトニ在リ政府ハ乃
チ直ニ大島公使ニ電訓シ前掲ノ兩大要件ニ付キ朝鮮政府
ト相當ノ條約ヲ締結スヘキコトヲ命シタリ因テ同公使ハ
數次韓廷ト會商ヲ開キタル上遂ニ同年八月廿日ヲ以テ暫
定合同條款ナル一ノ條約ヲ締結シ朝鮮内政ノ改革ヲ明約
セシメ又同月二十六日ヲ以テ日韓兩國盟約ト名クル攻守
同盟條約ヲ締結シ以テ日韓兩國カ清國ニ對シ攻守同盟ノ
責務ヲ確定スルト同時ニ朝鮮方一個獨立ノ邦國タル實相
ヲ表彰セシメタリ其暫定合同條款ノ概要ヲ舉クレハ(一)朝
鮮政府ハ日本政府ノ勸告ニ從ヒ其内政ヲ改革スルノ急務
タルヲ覺知シ各節順序ヲ追ヒ之ヲ履行スルコトヲ保證ス
ルノ旨ヲ約シ(二)京釜及京仁ノ間ニ建設スヘキ鐵道ハ朝鮮
政府ノ財政未タ裕カナラサルヲ慮リ日本政府若ハ日本ノ

或ル會社ニ於テ時機ヲ見計ヒ之ヲ起工セムコトヲ希フト
ノコトヲ規約シ(三)日本政府カ既ニ架設シタル京釜及京仁
間ノ軍用電線ハ時宜ヲ酌量シテ條款ヲ訂立シ以テ永ク存
留ヲ圖ルトノコトヲ規定シ(四)兩國ノ交際ヲ親密ニシ貿易
ヲ獎勵スルカ爲メ朝鮮政府ハ全羅道ニ於テ一ノ通商港ヲ
開クコトヲ約シ(五)本年七月廿三日王宮近傍ニ於テ起リタ
ル兩國兵員偶爾衝突ノ事件ハ彼此共ニ之ヲ追究セサルヘ
シト定メ(六)日本政府ハ素ト朝鮮ヲ助ケテ其獨立自主ノ業
ヲ成就セシメムコトヲ希望スルニ因リ將來此目的ヲ達ス
ル爲メ兩國政府ハ各委員ヲ派シ會同議定スルコトアルヘ
シト規定スル等ニシテ因テ以テ朝鮮政府ハ爾來條約上ノ
義務トシテ嘗テ日本ヨリ勸告シタル内政改革ヲ實行スヘ
キノ責務ヲ負フニ至リ又日韓兩國盟約ノ概要ハ其緒言中
ニ於テ朝鮮政府ヨリ清兵撤退ノ一節ヲ以テ朝鮮國京城駐
在日本特命全權公使ニ委託シテ代辨セシメタル以來兩國

政府ハ清國ニ對シ既ニ攻守相助クルノ地位ニ立テリ就テ
ハ其事實ヲ明著ニシ并ニ兩國事ヲ共ニスルノ目的ヲ達セ
ムカ爲メ左ノ條款ヲ開列スト云フニ始リ(第一)此盟約ハ清
兵ヲ朝鮮國ノ境外ニ撤退セシメ朝鮮國ノ獨立自主ヲ鞏固
ニシ日朝兩國ノ利益ヲ増進スルヲ以テ目的トス(第二)日本
國ハ清國ニ對シ攻守ノ戰爭ニ任シ朝鮮國ハ日兵ノ進退及
其糧食準備ノ爲メ及フ丈ケ便宜ヲ與フヘシ(第三)此盟約ハ
清國ニ對シ平和條約ノ成ルヲ待テ廢罷スヘシト規定シタ
リ蓋シ朝鮮ノ獨立ヲ表彰スル爲メニ何故ニ日韓攻守同盟
ノ條約ヲ締結スルノ必要アリシヤト云ヘハ本來一個ノ獨
立國トシテ平時ト戰時トニ於テ如何ニ世界列國ノ間ニ其
位地ヲ置クヘキヤヲ知ラサル朝鮮政府ノ事ナレハ牙山開
戰以來事實上我國ノ同盟タルニ拘ラス尙ホ竊ニ在京城歐
米強國代表者ニ内談シ日清兩國ノ軍隊ヲ其國內ヨリ撤退
セシムルノ周旋ヲ乞フ等平仄ニ合ハサル舉動多ク將來萬

般ノ障害是ヨリ醸出スルノ恐アルニ由リ今一ノ國際條約ノ効力ニ依リ一面ニハ彼等カ一個獨立ノ邦國トシテ公然何レノ國トモ攻守同盟ヲ爲スヘキ權利アルヲ表彰スルト同時ニ他ノ一面ニハ堅ク彼等ヲ我手中ニ繫留シ敢テ他顧スル所莫カラシムル爲メ一舉兩得ノ策ニ出テタルニ外ナラス(豐島海戦ノ後數日朝鮮領海ニ於テ我軍艦高千穂ヲ擱置南浦州號ナル船ヲ對シテ檢査ヲ行ヒタルカ爲メ在韓獨逸領事ハ中立國ノ海岸ニ於テテ中立國ノ船ヲ檢問スルハ國際公法ノ許サレサル所ナリトシテ朝鮮政府ニ詰問シテ獨逸領事カ國際公法ノ論據ノ當否ハ茲ニ論スルニ及ハサレトモ斯ル紛争ノ現出シタルハ畢竟朝鮮政府ノ位置ノ曖昧ナルニ基因シタル)日韓兩國ノ盟約ハ日清兩國交戦ノ終了ニ至ル迄ハ其効力ヲ失ハス第三者タル歐米各國モ爾來何等ノ異議ヲ出スモノナキニ至リタレトモ彼ノ日韓合同條款ハ果シテ該國ノ內政改革ノ事業ニ對シ如何ナル効果アリシカト云ヘハ内外ノ形勢種々意ノ如クナラサルモノ少カラスシテ本條約ノ條款多クハ一紙ノ空文ノ如クナルニ至リタル事情ハ後ニ記述スル所アルヘシ

七月二十三日事變後ニ於ケル朝鮮政府ノ動作ハ大院君カ

大院君ノ復讐政略

內政改革ノ名ヲ假リ第一ニ王妃ノ戚類タル諸閥ニ對シ多年ノ宿望タル復讐ヲ行フニ始リタリ閔族ハ多ク流竄ノ酷刑ニ處セラレタリ(閔族ハ流地ヨリ直ニ還レテ清國ニ往ケリ)此間王妃ノ一身スラ殆ト危險ナリシモ外ニ在テハ我公使カ堅ク暴戻ノ所爲ヲ禁シ内ニ在リテハ王妃親ヲ大院君ノ膝下ニ哀訴シ本心深ク前非ヲ悔ヒタルノ容態ヲ飾リ妙ニ彼ヲ欺瞞シ僅ニ一縷ノ生命ヲ繋キ留メタレトモ固ヨリ從來ノ如ク牝雞ノ晨スルヲ許サレス空シク深宮ノ裡ニ蟄伏シタリ左レハ滿廷ノ實權ハ大院君一人ニ歸シタレトモ何レノ國ニ於テモ斯ル革命的事變ノ後ハ先ツ國內ノ人心ヲ取攬スル爲メ其正面ノ敵黨ヲ除クノ外ハ各種ノ黨類ニ對シ多少ノ満足ヲ與フルノ必要ヲ生スルコト常ナルヲ以テ今日ノ朝鮮モ亦此例外ニ出ツル能ハス從來該國內ニ於テ温和漸進ノ老輩トシテ興望アリト云フ金宏集魚允中ノ一派アリ大院君ハ之ヲ以テ内閣ヲ組織セシメタレトモ此外當時朝鮮ニハ別ニ改革

金魚内閣

派開化派或ハ日本黨ト稱スルモノアリ即チ金嘉鎮金鶴羽
兪吉濬安嗣壽及金玉均朴泳孝等ノ殘黨ヲ糾合シタル一派
ニシテ其人員甚タ衆多ナラス其勢力甚タ強大ナラス閔族
旺盛ノ時代ニハ當時ノ政府ニ容レラレス閑散ノ地ニ棄ラ
レ居タルモノ多ク或ハ外國ニ放逐セラレタル者サヘアリ
シモ今ハ彼等カ自稱スル日本黨ナル題目ノ下ニ自ラ朝鮮
國人ノ中ニテ特ニ日本ノ後援ヲ得ルハ我黨ナルヘント自
信シ又在京城我公使館ニ於テモ兎ニ角彼等ハ朝鮮國內比
較的ニ多少ノ智識ヲ有シ且ツ多クハ日本語或ハ英語ヲ解
スルノ便利アルカ爲メ自ラ之ヲ親近シタルニ由リ彼等ハ
茲ニ始テ一種ノ勢力ヲ得朝鮮政府モ全ク彼等ヲ政府ノ外
ニ放置スル能ハザル事情ヲ生シ竟ニ軍國機務處ト稱スル
一種合議体ノ官衙ヲ新設シ彼等ノ多數ヲ以テ該衙ノ議員
ニ充用シタリ

以上論スル如ク朝鮮政府ハ閔族敗退シテ王妃羽翼ヲ戕

タル後ハ第一ニハ頑固保守的ノ大院君ノ一派カ大權ヲ握
リ第二ニハ温和漸進主義ナル金宏集魚允中ノ老輩ヲ以テ
内閣ヲ組織シ第三ニハ日本黨寧口躁進黨ノ半知半解ノ開
化者ヲ糾合シタル合議体ノ軍國機務處ヲ新設シ此軍國機
務處カ總テノ改革案ヲ起草スル事トナリタレハ固ヨリ頑
迷偏執ノ大院君トハ其意見一々衝突スヘキコト必至ノ勢
ニシテ其中間ニ位スル金魚内閣ハ執レノ一方ニモ左袒ス
ル能ハス又執レノ一方ヲモ制抑スル能ハス俗ニ所謂板挾
ノ姿トナリ獨リ自ラ困難ヲ極ムルノミ朝夕徒ニ坐上ノ空
論ニ向ヒ生死ヲ賭シテ争鬪シ(新ル黨争ノ間ニ於テ他日金鶴羽ハ本
院君ノ使喚ニ由リ暗殺セラレタリ)實
務ニモ舉ル所ナク加之朝鮮國人ノ特色タル猜疑深キノ邪
念ト陰險ナル手段ヲ施スニ憚ラサルノ惡徳トハ其争鬪ヲ
シテ往々彼此陷構排擠スルヲ事トスルニ至リ相互ノ怨恨
自ニ月ニ增長シ朝友夕敵ノ狀ヲ露シ到底一致協同シテ事
ニ從フヲ望ムヘガラサルノ勢ヲ馴致シタリ是レ朝鮮内政

大院君及朝鮮内閣
員ヨリ平壤ニ駐在
スル清將ニ款ヲ通
シタル密書ノ露見

ノ改革カ竟ニ失敗ニ歸シ何等ノ効果ナキニ至リタル重要
ナル原因ナルヘシ
平壤陥落ノ以前朝鮮ノ官民ハ日清ノ勝敗果シテ何レニ決
スヘキヤヲ疑ヒ居リ且ツ多クハ最後ノ勝利ハ清國ニ歸ス
ヘシトノ臆想未タ消滅セサルノ間ナレハ大院君及内閣諸
員ハ常ニ日清ノ間ニ兩端ヲ持シ居リ現ニ大院君、金宏集ノ
輩ハ竊ニ腹心ノ者ヲ平壤ニ派遣シ該地ニ滯陣スル清將ニ
款ヲ通シ豫メ清軍勝利ノトキ其詰責ヲ逃ル、ノ地ヲ爲シ
タリ(平壤平定後此輩ヨリ清將ニ贈リタル密書ハ第一軍司令官山縣伯爵ノ手ニ分捕
タリ(シ同伯爵ヨリ更ニ余ニ送致シ來リ他日井上伯爵カ朝鮮ニ赴任シタル後大院君ヲ該
政府ヨリ放逐スルノ必要生シタルトキ特ニ此)故ニ彼等ハ我政府ノ勸告ニ
密書ヲ取り出しテ彼ヲ責問シタルコトアリ)故ニ彼等ハ我政府ノ勸告ニ
面從シ其内政ノ改革ヲ舉行スルノ間ニモ尙ホ嘗テ李鴻章
ヨリ如何ナル事情アルモ朝鮮政府ハ日本ノ勸告ヲ拒絕ス
ヘシトノ脅迫的命令ヲ無視スル能ハス(此命令ハ牙山開戦ノ以前ニ
廷ニ嚴談セシメタルモノナリ其)是レ兩大國ノ間ニ存在スル小弱國ノ
頃大島公使ヨリ余ニ報告セリ)常態ニ於テ免レサル所ニシテ事情誠ニ憫ムヘキニ似タレ

トモ彼等カ斯ク貳心ヲ抱ク間ハ當時如何ニ我政府カ劃切
ニ内政改革ノ必要ヲ勸告スルモ彼等ハ常ニ事ヲ左右ニ托
シ脚躡因循レテ苟モ日月ヲ遷延シタルノミナルヤ論ヲ待
タス是亦朝鮮内政ノ改革其時機ヲ失シ久ク其効果ヲ見ル
能ハサリシ原因ノ一タルヘシ
朝鮮政府ハ上來云フ如ク彼此相互ニ軋轢シタルモ又全ク
其内政改革ノ事業ヲ放棄シ置クトキハ到底内外ノ輿望ニ
副フ能ハサルヲ熟知スルヲ以テ兎モ角モ或ル程度迄ハ改
革事業ヲ實行セムト企圖シタルニ相違ナシ然レトモ驟テ
當時ノ實況如何ト顧レハ清國ノ軍隊ハ逐次ニ大沽山海關
ヨリ進ミテ平壤ニ屯集シ其兵數ニ超エタリト云ヒ今
ハ朝鮮北部ノ地方ハ全ク清國軍隊ノ管轄ノ下ニ離伏シ又
我第五師團長野津陸軍中將カ引率シテ朝鮮ニ進行スヘキ
全軍ハ元來其順路宇品馬關ヲ經テ仁川港ニ直航スルヲ以
テ最モ便利トシタリシモ當時我海軍部内ニ於テ清國北洋

朝鮮國土ヲ日清兩
國軍隊ニテ各其
一半ヲ占領シタル
姿勢

艦隊ノ勢力未タ全ク滅殺セサル間ニ我海軍力ヲ分派シ多
數ノ運漕船ヲ馬關以外ノ大海ニ暴露シ仁川ニ直航セシム
ルハ甚タ危險ニシテ海軍戰術ノ許サ、ル所ナレハ海軍
ハ之ヲ安全ニ護送スルノ責任ヲ負フコト能ハサルヲ恐ル
ト云フ說多キニ依リ已ムヲ得ス全軍其數ヲ盡シテ釜山ニ
上陸シ陸續北進ノ途ニ就クコト、ナリ又我第三師團派出
ノ別働枝隊ハ元山津ニ上陸シ咸鏡道ヲ經テ平壤ニ直進ス
ルコト、ナリタレハ朝鮮國土ヲ南北兩大部ニ分割シ日清
ノ兩軍各自ニ其一半ヲ占領スル姿トナリ當該各地方ハ行
軍ノ準備軍需ノ徵發ノ爲メ擾亂繁忙ヲ極メ朝鮮全土殆ト
戰場ニ異ナラス朝鮮政府政權ノ及フ所ハ僅ニ京城及其近
傍ニ止ルノ實勢ナレハ朝鮮政府カ如何ニ内政ノ改革ヲ實
地ニ擧行セムト謀ルモ殆ト着手スルニ由ナカリシハ亦餘
義チキ次第ナルヘシ左レハ此際朝鮮政府カ僅ニ實行シ得
タル改革ハ第一ニ中央政府ノ官吏數輩ヲ交迭スルト行政

機關タル各衙門ノ官制ヲ創設スルトニ止リ當時我國人ハ
往々此官制改革ヲ目シテ一片紙上ノ改革ト云ヒ冷笑シタ
リ然レトモ以上述フルカ如キ朝鮮内地ノ事情ノ下ニ在テ
彼等ハ如何ニシテ此以上ノ改革ヲ斷行シ得ヘキヤ之ニ對
シテ種々ノ酷評ヲ下スハ到底無理ノ注文ト謂フヘシ然レ
トモ是ノ如キノ事情ハ内政改革ノ進路ニ向ヒ巨大ノ障害
ヲ與ヘ其時機ヲ誤リタル原因ノ一タリシハ亦疑フヘカラ
ス

朝鮮ノ内情ハ右ニ述フルカ如クナレトモ我國カ該國ニ對
スル政略ハ七月二十三日以後歩々愈深入セサルヲ得サル
ノ勢ヲ生セリ然レトモ第一ニ我政府カ將來朝鮮ニ對スル
政略ヲ如何ナル程度迄ニ進行シ得ヘキヤ之ヲ約言スレハ
我國ハ將來朝鮮ヲ如何ニスヘキヤト云フノ問題決定セサ
レハ我外交上隨時操縱其宜ヲ得ルノ方針ヲ確定スヘカラ
ス大島公使ハ頻々余ニ向ヒ廟謨ノ在ル所ヲ内訓セムコト



ナ稟請シタリ因テ余ハ八月十七日ヲ以テ四個ノ問題ヲ列
舉シ之ヲ閣議ニ提出シ先ツ廟議ヲ確定セムコトヲ望メリ
其概要ハ(甲)日本政府ハ既ニ内外ニ向ヒ朝鮮ヲ以テ獨立ノ
一國ナリト表明シ又其内政ヲ改革セシムヘシト宣言シタ
リ今後日清交戦終局ニ至リ勝利果シテ我ニ歸シタル後ト
雖モ依然該國ノ自主ニ放任シ自他共ニ毫モ之ニ干涉スル
所ナク將來其國ノ命運ヲ彼カ自力ニ一任スルヲ以テ一策
トシ(乙)將來朝鮮ヲ以テ名義上一個ノ獨立國トスルモ日本
ハ間接直接ニ永久若ハ或ル長時間其獨立ヲ扶植シ以テ他
ノ外侮ヲ禦クノ勞ヲ執ルヲ以テ他ノ一策トシ(丙)朝鮮ハ到
底其自力ヲ以テ獨立ヲ維持スル能ハス亦日本カ直接ト間
接トヲ論セス單獨ニ之ヲ保護スルノ責務ニ任スルハ得策
ニ非ストスレハ嘗テ英國政府カ日清兩國ニ勸告シタル如
ク將來朝鮮領土ノ保全ハ日清兩國ニ於テ之ヲ擔當スルヲ
約スルヲ以テ亦一策トシ(丁)朝鮮カ自力ヲ以テ獨立スル能

ハス又我國カ單獨ニ之ヲ保護スルノ任ニ當ルヲ以テ得策
ニ非ストシ又日清兩國ニテ該國ノ領土ノ保全ヲ擔任スル
モ竟ニ永ク彼我協同ノ望ナシトスレハ將來朝鮮國ヲ以テ
歐洲ニ於ケル白耳義瑞西ノ如ク各強國擔保ノ中立國ト爲
スコトヲ以テ亦他ノ一策トスト云ヒ余ハ此閣議中右四個
ノ問題ニ對シ逐一ニ細註ヲ加ヘ其間一利一害ノ存スル所
ヲ詳述シタリ亦閣議ノ末文ニ於テ今尙シ其擇ム所ヲ失ス
レハ頗ル禍害ヲ將來ニ遺スノ恐ナキ能ハサレトモ兎モ角
モ朝鮮ヲ如何スヘキヤトノ廟議ヲ茲ニ一定シ置カサレハ
今日外交上ノ操縦ニ於テモ軍事上ノ行動ニ於テモ頗ル困
難ヲ感スルヲ以テ速ニ廟議ヲ確定セムコトヲ望ム且ツ閣
僚ノ中尙ホ此他ニ良案アレハ固ヨリ之ヲ聽カムコトヲ乞
フトノ旨ヲ以テシ(該閣議ハ參考ノ爲メ
本章末尾ニ附録ス)懇々閣僚ト審議詳論シ
備サニ其得失利害ヲ講究シタレトモ當時ニ在テハ日清兩
軍最後ノ勝敗何レニ歸着スヘキカ將來ノ形勢如何ニ定マ

ルヘキカチ知ラサレハ我對韓政策モ亦執一不動ノ方針ニ
出ツル能ハサル事情アルカ故ニ我廟堂文武ノ重官ハ目下
朝鮮ノ事体ヲ輕視スルニハ非サレトモ何人モ即時對韓永
久ノ政畧ヲ確定スル能ハス且ツ嘗テ他章ニ於テ論述シタ
ルカ如ク總テ朝鮮問題ハ當局ノ主題タルニ拘ラス往々他
ノ關係上ヨリ種々ノ客題ヲ變出シ之カ爲メニ何時既定ノ
方針ヲ變更セサルヲ得サルノ場合ヲ生スルヤモ計ラレス
余カ今回ノ提議ニ對シ内閣同僚ノ議論モ遂ニ正式ヲ履ミ
廟議ヲ決定スルニ至ラス僅ニ當分ノ内ハ余カ四個ノ問題
中先ツ乙策ノ大意ヲ目的トナシ置キ他日更ニ廟議ヲ確定
スル所アルヘシト議決シタリ余ハ當局責任者トシテ斯ル
不確ナル廟議ヲ實行スルハ甚々困難ナルヲ覺エタレトモ
去リトテ上來云フ所ノ事情ニ照シ今強テ之ヲ確定セムコ
トヲ望ムハ亦殆ト出來得ヘカラサル事ニ屬ス因テ兎モ角
モ閣僚協議ノ結果ニ依從シ將來臨機應變ノ處分ヲ取ルノ

朝鮮國ニ於ケル鐵
道及電信ノ問題

外ナシト思料シ先ツ此意ヲ大島公使ニ訓令シタリ同公使
ハ此政府ノ内情ヲ推察セサルニ非サレトモ實地ニ斯ル内
情ヲ酌量シテ外交上ノ操縦ヲ爲サムトスレハ何事ニモ支
借抵觸シ特ニ朝鮮政府ニ對スル動作ハ自ラ外面強キ程ニ
ハ裏面強カラヌ厲色嚴語スレトモ手腕其後ニ續カス有体
ニ云ヘハ我國カ朝鮮ニ對スル政畧ハ常ニ外來ノ事情ニ制
セラレ剛柔弛張殆ト意ノ如クナラサルコト甚々多ク是ニ
於テ乎内政改革ノ事業ニ於テ我政府カ嘗テ公言シタル所
ヲ實行スル能ハス往々隔靴搔痒ノ憾ヲ免レサリシ是レ朝
鮮内政ノ改革カ今日ニ至リ尙ホ其成功ヲ見ルヲ得サル原
因ノ一ト謂フヘシ

當初ヨリ我國官民ノ間ニ於テ朝鮮内政ノ改革ト牽連シタ
ル重要問題アリ即チ朝鮮國ニ於ケル實益アル企業就中鐵
道ノ築造ト電信ノ架設トハ是非トモニ我掌中ノ物トシ政
府若ハ人民ノ手ニ於テ經營シ得ルノ特許ヲ朝鮮政府ヨリ

讓與セシムヘシト云ヘリ故ニ大島公使ハ七月廿三日ノ事
變以前朝鮮政府ニ對シ鐵道電信ノ問題ニ付キ既ニ其端緒
ヲ開キ置キタル程ナレハ事變ノ後日韓合同條款ヲ締結シ
タル際全ク右ノ讓與ヲ確定セシメ外交上ノ作用トシテハ
能事了リタレトモ如何ニ之ヲ實行スヘキヤト云フ一段ニ
至リ第一ニ斯ル一大企業ヲ施設スルニ方リ其費用ヲ何處
ニ求ムヘキカト云フ問題起リ或ハ非常ノ時ニ處スルハ非
常ノ事ヲ以テスルニ非サレハ其功ヲ奏スヘカラサルカ故
ニ一切ノ費用ハ國庫ノ支出トスヘシトノ議アリタレトモ
國庫ノ公金ヲ以テ他國ノ鐵道ヲ築造スルハ頗ル其順序ヲ
得ストノ故障ヲ生シ且ツ今ヤ日清兩國ノ戰爭正ニ酣ナル
時ニ方リ將來ノ軍費如何ニ多端ナルヘキヤ豫定シ難キノ
際輕々國庫ヨリ巨額ノ金額ヲ支出スルハ甚々危殆ナリト
云フ説起リ當初政府部内ニ於テ頗ル熱心ニ朝鮮鐵道論ヲ
主張セシ人々モ到底國庫支出ノ議ハ言フヘクシテ行フヘ

カラサルノ事トナセリ因テ余ハ曩ニ夫ノ豪商巨族ノ有志
者ニシテ朝鮮鐵道ノ必要ヲ説キタル人々ヲ招キ彼等ヲ懲
憑シテ此企業ニ當ラシメムトシタリ然ルニ彼等ハ最初ノ
熱心ニモ似ス遲疑逡巡シ或ハ日本政府ヨリ損害補償ノ擔
保ヲ得タシト云ヒ或ハ其資金ニ對シ特別ノ補助金ヲ得タ
シト云ヒ政府カ直接間接ニ國庫ノ負擔ヲ引受ケサルモ彼
自奮シテ此事業ヲ企ツヘシトイフ者ハナク外交上既得ノ
讓與モ亦竟ニ畫餅ニ歸スルニ至レリ(其後京釜間ノ鐵道築造ノ分ハ軍
費ヨリ支出スヘシトノ議アリ
マレトモ時機頗ル後レ)總テ此頃朝鮮ニ對スル問題ハ其政事上ト
之ヲ實行スルニ至ラス) 企業上トニ論ナク劈頭ニ議論喧囂タリシ事モ實地ニ於テ
之ヲ斷行スルニ至テハ寥寥々其聲ヲ息メ今日ヨリ見レハ何
ノ一事モ做シ得サリシ姿ヲ貽シタリ是レ政府ハ當時比較
上朝鮮問題ヨリモ一層重大ナル問題ノ爲メニ專心ニ朝鮮
ニ向ヒ行動スル能ハサリシト民間ノ有志豪族ト稱スル輩
モ戰勝ノ開聲ト共ニ空望ヲ抱キテ躁動シタル程ニハ其手

腕敏活ナラサリシトニ因ルト雖モ誠ニ痛惜ニ堪ヘサル次
 第ナリ
 以上列擧シタル如ク朝鮮内政改革ノ事業ハ該國內面ノ事
 情ノ錯雜極マリナキト我國カ外面ヨリ之ヲ誘掖援助スヘ
 キ方法ノ困難甚タ多キトニ由リ到底我國人カ屬望シタル
 如キ成績ヲ見ル能ハサルハ誠ニ己ムヲ得ス否ナ寧ロ當然
 ノ結果ナリト云フヘキ事ナリ然レトモ國民ハ之ヲ視テ兎
 ニ角大ニ失望シタリ而シテ彼等ハ自家ノ失望ノ基因ヲ研
 究セシテ單ニ之ヲ我政府ノ措置其宜ヲ得サルニ歸シ特
 ニ大鳥公使ヲ非難スルノ聲日々ニ喧噪ヲ加ヘタリ然レト
 モ余ハ始ヨリ朝鮮政府ノ改革カ果シテ世人カ豫期スル如
 ク容易ナル業トモ思ヒ居ラサルノミナラス元來改革其事
 ニ對シ甚タ重視シ居ラサリシ故ニ此事局艱難ノ際京城駐
 劄公使ヲ更迭スルハ得策ニ非ストシ常ニ一身ヲ以テ衆謗
 ノ衝ニ當リ之ヲ保護シタレトモ政府部内ニ於テモ竟ニ同

大鳥公使ノ召還并
上伯爵ノ赴任

公使留任ノ得失如何ヲ疑フニ至リ到底同公使ヲシテ久ク
 韓地ニ在ラシムル能ハサルノ事情ヲ生シ且ツ今ヤ交戦ノ
 局面意外ニ擴張シ漸ク歐米各國カ再ヒ干涉ヲ試来ラムト
 スルノ際ナレハ京城ニ駐劄スヘキ我公使ハ内外ニ資望勢
 カチ有スル一人ヲ擧ゲ大概該國ニ關スル事務ヲ專決斷行
 セシムルノ必要ヲ感シタル故ニ大鳥公使ノ後任トシテ其
 人ヲ撰擇スルノ折柄當時ノ内務大臣井上伯爵ハ自ラ其任
 ニ當ラムコトヲ請ヒ遂ニ同公使ヲ召還スルニ至レリ之ヲ
 要スルニ朝鮮内政改革ノ第二期モ亦種々ノ事情ノ爲メ其
 進行ヲ阻撓セラレ畢竟茲ニ失敗ノ歴史ヲ寫サ、ルヲ得サ
 リシハ甚タ不愉快ノ事ト謂フヘキナリ

○明治二十七年八月十七日閣議

朝鮮事件ハ當初大鳥公使ノ赴任ニ臨ミ籌畫セラレタル所ノ廟
 算ニ比スレハ外交上ニ於テモ軍事上ニ於テモ容ニ局面ノ變遷
 ニ遭遇シ歩々深入遂ニ今日ノ形勢トハナレリ而シテ目下施ス
 ヘキ政略ニ至テハ隨時廟議ノ決定スル所アルヲ以テ其成績ニ

百七十二

運ヒ之ヲ遂行スヘキコトハ固ヨリ論ヲ待オスト雖モ將來朝鮮
ヲ如何スヘキヤト云フ問題即チ本件最後ノ大目的ハ如何ト云
フ問題ニ至テハ第一ニ帝國政府ハ朝鮮ノ内政ヲ改革スル爲メ
又其獨立ヲ永久ニ保全スル爲メ竟ニ清國ト交戦セサルヲ得サ
ル場合ニ立到リ現ニ何ホ交戦中ニ在レハ到底日清最後ノ勝敗
ヲ見ルノ日ニ非スムハ實際ニ起リ來ルヘキコトニハ無之然レ
トモ今ニ於テ此問題ニ對スル一ノ方針ヲ確定シ置クコトハ自
今帝國政府カ執行スヘキ外交上及軍事上ノ措施ニ關シ頗ル緊
切ノ關係ヲ有スルノミナラス大島公使ヨリモ本問題ニ付キ政
府ノ方針ヲ伺ヒ來リ居レハ本大臣ハ茲ニ左記ノ考案ヲ具シ以
テ預メ廟議ノ確定スル所ヲ聽カムコトヲ望ム

甲、帝國政府ハ既ニ内外ニ向テ朝鮮ヲ一ノ獨立國ト公認シ又
其内政ヲ改革セシムヘシト聲明セリ就テハ今後清國トノ
最後ノ勝敗相決シ面シテ我輩カ冀望スル如ク我帝國ノ勝
利ニ歸シタル後ト雖モ依然一個ノ獨立國トシテ全然其自
主自治ニ放任シ我ヨリモ之ニ干渉セズ亦毫モ他ヨリノ干
渉ヲモ許サス其運命ヲ彼ニ一任スル事

但シ此方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ス

一、朝鮮ノ如キ久ク紀綱廢頽萎靡不振官民共ニ獨立ノ志尙

百七十三

ニ乏シキ國柄ニ在リテハ假令一時他ノ刺戟ニ因リ其内
政ニ多少ノ改革ヲ加ヘタリトモ之ヲ永久ニ維持シ又時
ニ應ジテ之ヲ改進セシムルコトハ甚ダ疑ナキコト能ハ
ス若シ然ルトキハ帝國政府カ今回大兵ヲ派出レ巨額ノ
軍費ヲ使用シタル結果ハ竟ニ水泡ニ歸スルヲ免レサル
ヘキヤ

二、若シ此ノ如ク朝鮮カ自ラ獨立ヲ保持シ難キコトヲ知リ
ナカラ其將來ノ命運ヲ全ク彼ニ一任スルトキハ或ハ恐
ル他日清國ハ再ヒ其隙ヲ窺ヒ間接ニ直接ニ朝鮮ノ國政
ニ干渉レ或ハ現在ノ政府ヲ顛覆シ事大黨ト稱スル閔族
一派ノ徒ヲ以テ更ニ政府ヲ組織セシメ恰モ日清交戦以
前ノ如キ清韓ノ關係ヲ再現セシムルコトヲ而シテ一旦
如此場合ヲ生スルトキハ帝國政府ハ其經歷上袖手傍觀
シテ全ク清國ノ所爲ニ一任スルコト能ハサルハ敢テ言
テ待タサルカ故ニ必ス再ヒ之ニ對シ爭論セサルヲ得サ
ルニ至ルヘク而シテ新ル争議ハ到底梅祖ノ間ニ圓滑ナ
ル委員ヲ結フコトハ極メテ得難キコトナレハ其極速ニ
再ヒ日清兩國間ノ平和ヲ就ルニ至ラサルヲ得サルヘシ
是恰モ日清兩國カ朝鮮ニ關スル戦争ノ歴史ヲ再演スル

ニ過キサルヘク然ルトキハ今回ノ盛舉ヲシテ殆ト徒勞
ニ歸セシメ兒戲ニ終ラシムルノ恐ナキカ
乙、朝鮮ヲ名義上獨立國ト公認スルモ帝國ヨリ間接ニ直接ニ
永遠若ハ或ル長時間其獨立ヲ保護扶持シ他ノ侮ヲ禦クノ
勞ヲ取ル事
但シ此方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ス
一、朝鮮ノ獨立國タルコト及其疆土ヲ侵略スルノ意ナシト
ノコトハ帝國政府カ從來各國政府ニ向テ公言シタル所
ナレハ今假令間接タリトモ彼半島ノ一王國ヲ以テ帝國
ノ勢力ノ下ニ屈服セシムルトキハ遂ニ他外國ノ非難ト
猜忌トヲ招キ或ハ之カ爲メニ無數ノ葛藤ヲ生スルノ憂
ナキカ
二、帝國政府ハ以上ニ述ルカ如キ困難ヲ顧ミス朝鮮ヲ保護
國ノ如ク取扱ヒ得ルトスルモ他日或事變ニ關シ清國露
國其他朝鮮ニ利害ノ關係ヲ有スル邦國ヨリ朝鮮ノ獨立
ヲ侵害スルコトアルニ際シ帝國ハ獨力ヲ以テ終始同國
ノ外患ヲ防禦シ之ヲ保護スルコトヲ得ヘキカ
丙、朝鮮ハ其自力ヲ以テ其獨立ヲ維持スルコト能ハス又我帝
國ニ於テモ直接ト間接トヲ問ハス獨力ヲ以テ之ヲ保護ス

ルノ責ニ任スルコト能ハストスルトキハ嘗テ英國政府カ
日清兩國政府ヘ勸告シタルカ如ク朝鮮領土ノ安全ハ日清
兩國ニ於テ之ヲ擔保スル事
但シ此方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ス
一、帝國政府ニ於テ其戰勝ノ勢ヲ以テ清國政府ト協議セム
ニハ開戰前ニ於ケルカ如ク同國政府モ頑冥固陋ノ說ヲ
主張セサルヘシト雖モ彼儀式的宗屬問題ハ到底之ヲ拋
棄セサルヘシト雖モ我ニ於テモ開戰前ニ於テハ曾テ英
國政府ヘ明言シタル如ク彼若シ屬邦論ヲ提起セサレハ
我亦必スシモ獨立論ヲ主張セサルヘシト云ヒシト雖モ
戰勝ノ後ニ至テハ清國カ朝鮮ニ於ケル關係ニシテ實利
上ト名義上トヲ論セス苟モ帝國カ朝鮮ニ於ケル關係ヨ
リモ優等ナル觀アルコトハ到底帝國カ姑容耐忍スルコ
ト能ハサル所ナルヘシ故ニ或ハ斯ル無要ナル爭議ノ爲
メニ遂ニ又議破ル、カ否サレハ談判遲延シテ長ク交戰
國ノ情形ヲ繼續スルニ至ラサルカ
二、假ニ清國政府ハ我ニ屈服シテ宗屬關係ノ問題ヲ提起セ
ザリントセムカ日清兩國ニテ朝鮮疆土ヲ保全スルニ付
テハ勢日清兩國ヨリ朝鮮ノ政務ヲ補助スヘキ監督官若

ハ委員ヲ派遣セサルヘカヲサルノミナラス或ハ互ニ多
 少ノ軍隊ヲ駐屯セシムルノ要アルヘシ然ルニ日清兩國
 カ朝鮮ニ對スル利害ノ關係ハ常ニ相反スルノミナラ
 ス日清兩國政事家ノ主義モ常ニ氷炭相容レサルヲ以テ
 兩國政府カ朝鮮ニ對スル意見往々衝突シテ一致ニ歸セ
 サルニ至ルコト必セリ其極竟ニ第一疑問ニ於ケルカ如
 キ結果ヲ生セサルカ

丁、朝鮮カ自力ヲ以テ獨立國タルコトハ到底望ムヘカヲサル
 コト、又帝國カ獨力ヲ以テ之ヲ保護スルヲ不利ナリト
 シ又日清兩國ニテ其獨立ヲ擔保スルハ竟ニ彼此協同一致
 ナ得ヘキ望ナシトスルトキハ朝鮮ヲ以テ世界ノ中立國ト
 爲サムコトヲ我國ヨリ歐米諸國及清國ヲ招誘シ朝鮮國ヲ
 シテ恰モ歐洲ニ於ケル白耳義、瑞西ノ如キ地位ニ立タシム
 ル事

但シ此方策ニ付テハ左ノ疑問ヲ生ス

一、朝鮮國ニ最モ利害ノ關係厚キモノハ日清兩國ニシテ今
 回ノ交戦ノ如キモ日清兩國間ノ利害ノ衝突タルニ過キ
 サレハ此戰爭ノ結果ヨリ生ズル所ノ名譽ト利益トハ固
 ヨリ他ノ歐洲各國ニシテ分受セシムルノ必要ナク又之

ヲ分與セムトスルハ諺ニ所謂犬骨折テ鷹ノ餌食ト云フ
 カ如ク帝國ノ失フ所得ル所ニ超過スルノ觀ヲ呈シ頗ル
 帝國人民ノ満足セサル所ナルヘシ況ヤ帝國政府ハ大兵
 ヲ出シ巨額ノ軍費ヲ費シタルノ結果何ノ得ル所モナシ
 トセハ到底世論ノ攻撃ヲ免レサルヘキカ

右ノ如ク考察レ來レハ甲乙丙丁ノ四問題ハ何レモ一利害ヲ
 存スルモノニシテ若シ一タヒ其擇フ所ヲ失スレハ頗ル禍害ヲ
 後世ニ遺スノ恐ナキ能ハス然レトモ朝鮮ニ關スル將來ノ地位
 如何ヲ考フレハ遂ニ此四方策ノ外ニ出サルカ如シ而シテ其何
 レノ方策ニ歸着スルヲ問ハス日清交戦最後ノ勝敗相決シタル
 後ニ非サレハ相起ラサルノ問題ナリト雖モ廟算ハ豫メ此内ノ
 一ニ付キ確定スル所ノモノアラサレハ今日外交上ノ操縦ニ於
 テモ又軍事上ノ行動ニ於テモ頗ル緊要ノ關係アリ故ニ豫メ廟
 算ヲ確定シ置カレムコトヲ望ム而レテ以上ニ列舉スル四方策
 ノ外尙ホ閣僚諸公ニ於テ高明ナル考案アラハ固ヨリ其方策ヲ
 聽カムコトヲ冀望ニ堪ヘス

第十二章 平壤及黃海戰勝ノ結果

明治二十七年九月中旬ノ頃ニ於テ殆ト同時ニ世界ノ耳目
 ナ聳動シタルハ平壤及黃海戰勝ノ快報ナリ作戰ノ計畫戰

0434